
大地と月の約束「タイちゃんのアタシ」

萬權さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地と月の約束「タイちゃんとアタシ」

【Nコード】

N8342L

【作者名】

萬權さくら

【あらすじ】

タイちゃんはアタシに何かって言うときスをする。彼女じゃないのにヘンだよ？ 意地悪美形獣系男VS遅咲小動物系女子の

ちよいH胸キュン恋愛ハッピーエンド小説です。ちよつと意地悪なお坊ちゃまと平凡なようで非凡な女のコの甘いようで甘くない日々が綴られています。近すぎて気付かなかった恋心を乙女が自覚する瞬間は、素敵なドラマが生まれてくれるはず？ 女のコ視点でおくりいたします。 大地と月の約束シリーズ1 本編終

了後にブログ未掲載のオマケ番外掲載予定。

1 キスのある日常（前書き）

当作品にはオリジナル本編があり、その後日談エピソードを載せております。本編に触れていないため、作中「？」な部分が多々出てきます。

作中にはR表現が出てくる場合もあり、【大人表現有】と表記しております。読む読まないの判断は自己責任においてお願い致します。

1 キスのある日常

1 キスのある日常

タイちゃんはアタシに何かって言うときスをする。

唇を軽く吸うようなキス。

大人のキスじゃないけれど、小鳥のキスよりは唇の感触が伝わってくるから、その度に何だかスゴク意識せずにはいられない。

「疲れたから補給させろ」

って、タイちゃんは平気な顔をして勝手に唇を奪う。

チュツというリップ音がヤケに恥ずかしく感じてしまう。

アタシはその度に真っ赤になってしまう。

いつも心臓が破裂しそうになってしまう。

だってアタシのファースト・キスの相手はタイちゃん、今までキスどころか恋の経験だってしたことがないんだもの。

タイちゃんとじゃ経験値が違い過ぎるんだから、もうちょっと手加減して欲しいのだけど……。

さっきだって、駅のホームでいきなりチュツとやられた。

人前じゃ嫌だっていつも言ってるのに、全然聞いてくれる気がないみたい。

少しは人の意見も聞いて欲しいよ、もう。

キスをした後の唇は、ちょっと濡れて光ってて目のやり場に困るんだからね。

その唇をぺロリと舐めるタイちゃんを見ちゃうと心臓がバクバク

しちゃうんだよ。

だから、いつもアタシは不自然に視線を逸らすしかないの。
本当は走り出したいくらい恥ずかしい乙女心、タイちゃんは分か
ってるのかなあ？

だいたいにして。

タイちゃんとアタシは恋人同士じゃないのに、キスするのは変
だと思っただけだなあ……。

2 笑ってない笑顔

2 笑ってない笑顔

タイちゃんの笑顔は怖い。

ニツつと口角が上がると左右に立派な犬歯が剥き出しになる。笑っているのか威嚇^{いかく}しているのか判別に困る。せつかく整った顔立ちなのに、全然活かされてない。

ただでさえ体が大きくて、見た目が堅気の人に見えないのに、そんな笑い方したら悪人さんみたいだよ？

親切で落し物を拾ってあげても、カツ上げしているようにしか見えないよ？

転んだ子供を起こしてあげても、人攫いにしか見えないよ？

アタシはタイちゃんの将来が心配だよ。

就職口が狭まっちゃうこと間違いなし。

悪徳不動産屋とか街金とか、良くて凶悪犯担当の刑事さん。

そう言ったら、速攻でデコピンをお見舞いされた。

この笑顔は主にアタシをイジめる時に現れる。

「安心しろ。捕って喰ったりしねえよ」

って言うけど、全然安心できないのはアタシが小心者だから？

そのうち本当に頭からバリバリ食べられてしまつかもしれない。アタシの血は甘いらしいから。

本当はね、知っているんだ。

タイちゃんの笑顔が怖い理由。

口が笑っていても眼が笑ってないんだもん。

アタシのこと射抜くみたいに見てるんだもん。

できることなら、癒されるような笑顔を見せてくれないかなあ…

…。

3 モテる男の条件

3 モテる男の条件

タイちゃんは何故かモテる。

初めてタイちゃんと会った時、彼は隣に美人さんを連れていた。次に会った時も違う美人さんを連れていた。次に会った時も……以下略。

とにかくタイちゃんはモテる。

あんなに乱暴者なのに。

これは彼の容姿が一般基準で言うところの美形に部類されるからだと思う。

眼光鋭く、笑顔は怖くて少しばかり頂けないけど、切れ長の目と通った鼻筋は文句なしに綺麗。

眉間にはよく縦皺が刻まれてるけど、額の形とシャープな顎のラインは180度ビューにおいて完璧。

少し長めの襟足と前髪は、茶髪で無造作に見えるけど実はサラサラ。

薄めの上唇と厚めの下唇は、いかにもセクシー系でキスが上手そう。

というか上手いです。

日ごろ襲われているアタシのお墨付きをつけてもイイよ。

顔だけでなく体格だって良いの。

ホントにアタシと同じ年かと疑いたくなるくらい身長はビョーンと高い。

まだまだ伸び盛りみたいで、気が付くと腰の位置が高くなっている。

何を食べたらそんなにニョキニョキ伸びるのか秘訣を是非とも教えて欲しいよ。

腕力だつて凄いよね。

一見そんなに太くないのに、人を投げ飛ばす時には凄い力瘤がでるんだもん。

初めて目撃した時は、腰を抜かしそうになっちゃったよ。

そんなタイちゃんのデコピンや梅干攻撃は痛いんだから、少しは加減してくれてもいいと思う。

たまにはアタシの反撃も受けてよ。

100%避けるんだもん。

運動神経良すぎだよ。

サービス精神なさすぎだよ。

とにかく。

ちよつと、否、かなり野性味に溢れているけど、一つ一つのパーツがタイちゃんは整っているのだ。

容姿だけはメチャ恵まれた星の元に生まれたタイちゃんだけど、それを瞬時で無効にしてしまうほど性格に恵まれていない。

「もうちよつと丸くなるうよ。そしたら更にモテモテだよ?」
と言ったら、

「性格は生まれつきだ。それにこれ以上モテてどうする」
て返された。

憎らしいいったらありゃしない。

でもね、タイちゃん。

性格は後天性だから、タイちゃんの努力不足だと思うよ。

現に、双子のヨウちゃんは、いつもニコニコで優しい性格じゃない。

きっとタイちゃんよりモテモテ人生だよ？

「お前、人を見る目なさすぎ。騙されやすいにもほどがある」
タイちゃんは溜め息をつきながらアタシの低い鼻を抓んだ。
痛いよ、そんなしたって高くないよお。

4 オンナの闘い

4 オンナの闘い

バチンと小気味の良い音が響く。

発生元はアタシの左頬。

うららかな週末の昼下がり、商店街のド真ん中で思いっきり叩かれてしまいアタシは呆然。

目の前には美少女。

頬は薄っすらと染まり、形の良い唇は一文字に引き結ばれている。大きな瞳に溜まった涙は今にも零れ落ちてしまいそう。

でも泣きたいのはアタシの方だよ。

このお嬢さん、いったい誰！？

一度会ったら忘れられないような可愛いコなんだけど、全然記憶にないんですけど……。

「神也くんから離れなさいよ！」

リアクションを起こさないアタシを睨みつけながら美少女が叫ぶ。

アンタか！！

アンタのせいなのか、カミヤタイチ！！

横に突っ立っている原因たる迷惑男を見上げれば、事の展開を二ヤリと人の悪い笑みを浮かべて伺っている。

タイちゃんの反射神経なら避けてくれるの朝飯前なのに、助けて

くれなかつたわね！？
薄情者めえ。

しかもご丁寧にも相手に見せ付けるかのように、アタシの肩に腕を乗せてきたよお。

お嬢さん、誤解ですからね？
これ、単なる肘掛ひしかけですからね？

最近はおアタシとタイちゃんが並んでる姿って認知されつつあるのかと思つてた。

前みたいに女のコたちに影で小突き回される回数、格段に減つてきたから。

悪口とかは未だに聞こえよがしに言われるけどね。

まさかこの性悪男のラブラブ団隊員（生息数十人程確認済）に正面きつて襲われる日が来ようとは。

ちよつと前まで上手く逃げ回ってたんだけど、もう大丈夫かなつてすっかり油断してたよ……。

「巨乳美女好きだと思つてたから諦めてたのに！！
何でアンタみたいなツルペタ平凡女が彼女ヅラしてるの！？」
えつと……、ツルペタというのはアタシの胸のことだったりするのかな？

まあ、確かに。
微乳びじゅうな感じですけどね。
平凡ちゃんですけどね。

そんな事より根本的な問題があります。
アタシ、タイちゃんの彼女じゃないんですが……。

「あのね、アタシとタイちゃんとは一緒に居るけど恋人同士じゃない

いので、彼女になりたいなら本人に陳情ちんじやうしてもらいたいな、なんて……」

聞いてもらえるかどうかは定かでないけど、一応それなりに諭さとしてみたりする。

観察してもらえば、アタシがタイちゃんにくつついてるんじゃないって判明すると思うんだけどなあ。

傍はたから見て付き合ってるように見えちゃうって、アタシとしては大問題だよ。

女のコたちの苦情って何故かいつもアタシ宛。

タイちゃん本人に向けられない。

その情熱で果敢かかんにアタクすればいいのに、当たり所が違ちがってると思うのはアタシだけ？

誤解の張本人たるタイちゃんは、事態の收拾を図ろうとするとどこるか知らんぷりを決め込むつもりらしく、視線は明後日の方向だよ。お。

アタシは深い溜め息をつかづにはいられない。

「嘘つきー!!」

美少女がビシッとアタシを指差して更に激昂げっこうする。

「私、見たのよー!! 二人がキスしているところー!!」

うわーん、タイちゃんの馬鹿!!

だから所かまわずキスしないでって言ったのにいいー!!

「あれは…、その…、タイちゃんが勝手に……」

口を滑らせた途端に、美少女から般若に彼女が変身してしまった。うわーん、アタシの馬鹿!!

火に油を注いじやったよおおお。

もう修復不可能。

彼女の右手がグーを作って振り上げられたのを合図に、アタシは思わずタイちゃんをその場に捨てて 脱兎だつとのように逃げだした。タイちゃんに「置いていくとはイイ度胸だ」って後で散々と嫌味言われたけど、痛いのがなんだから仕方ないでしょ！

「タイちゃんのせいで酷い目に合ったよお・・・」

頬に氷嚢を当ててくれるタイちゃんに、一応は苦情を述べてみる。手当てしてくれるくらいなら、最初から庇ってよ。

でもやっぱり全然悪いと思ってないみたい。

だって、

「俺が表に立つたら、明日から闇討ちされる日々だぞ」

ってサラリと怖いことを言う。

その上、

「アレはお前が当然受けるべき闘いだ。それぐらいイイ思いしてるだろ？」

ってサラサラと宣った。

イイ思いって、イイ思いって、もしかアレのこと？！

いやああ！！

怖くて考えたくないよお……。

次からは女のコが近づいてきたらダツシュで三十六計だ！！

5 満月の夜は特別 【大人表現有】（前書き）

この頁は【大人表現有】です。
問題のない方のみ続きをどうぞ。

5 満月の夜は特別 【大人表現有】

5 満月の夜は特別 【大人表現有】

満月が近くなるとタイちゃんはキス魔になる。
普段から大概だけど、更に輪をかけてを回数が多くなる。
そして満月の夜がそのピーク。

「タイちゃん、唇が腫れちゃうよぉ…」

唇を食べられちゃいそうな、ちよつと乱暴なキスにアタシは力なく苦情を漏らしてみる。

舐めて吸って。

こんな時のタイちゃんは、やりたい放題。

力の入らない手で硬い胸板を押し返してみるけどビクともしやしない。

ちゅぷ。

リップノイズが耳をくすぐる。

ホント、やりたい放題。

こっちは酸欠なのと気持ちイイのとでクラクラだつていうのにい。しかもアタシの両手は抵抗虚しく速攻まとめて？まえられちゃった。

「喰われなくなかったら好きにさせろ」

戯れるようなキスから深い大人のキスに変わるのなんてアツという間。

条件反射とは恐ろしいもので、上唇の内側を舌先で撫でられると

アタシの唇は思わずフニヤって開いちゃう。
その隙をタイちゃんは逃したりしないからさすがだよ。

タイちゃんの舌がアタシの口の中に滑り込む。
ヌルリとした生々しい感触。

独立した生き物のように内側の軟らかい部分を蹂躪されると、思わずビクツと体に震えが走る。

どうしよう、すごく気持ちイイ…。

両手の自由を奪われて自分を支えられないから、足も小刻みに震え始めて思うように立ってられない。

「は…あ…ん…っ…」
きゃーっ！

息継ぎするのに鼻から変な声が漏れちゃったよ。

居た堪れないというか、こっ恥ずかしいったらない。

「ツキ…、もうちょっと舌出せ」

人の気も知らずにタイちゃんは変なリクエストをしてくる。

勘弁してよお。

おこちゃま指数の高いアタシには、今現在の状況でいっぱいいっぱいなんだってばあ。

ガクガクになってるアタシをタイちゃんは腰に腕を回して軽々と自分に密着させてくる。

そんなにしたら、爪先立ちになっちゃうよお。

そんなにしたら、しがみ付きたくなっちゃうよお。

タイちゃんがアタシに口付けるのには理由がある。

満月の夜に傍を離れないのにも理由がある。

その事をアタシもちゃんと解ってる。

でも。

だからこそ、色々と考えてしまふの。
本当にこんな流されてばかりで良いのになって。

というか。

タイちゃん少しは手加減してよお。

ぴちゃ…ぴちゃ…って音経てないでよお。

そんなに勝手無尽に口腔を撫で回さないで！

そんなにアタシの舌を吸わないでえ！

アタシだって満月の夜はチョビっただけ理性飛んでるんだよ。

いつもにも増してドキドキ倍増なんだよ。

タイちゃんの体から立ち上る香りにクラクラして気を失いそうな
ほどなんだよ。

思わず抱きつきたくなるほど頭が沸騰しそうなんだよ。

逆にアタシがタイちゃんを襲っちゃったら、どーするのよお。

そうこうしている内に限界きちゃいました。

ええ、もお独りで立ってられません。

よってタイちゃんの背中に腕を回して思いっきり抱き付いちゃう
ことにします。

「手、離して？ もう逃げない……」

えーい、この際だからギュウギュウに甘えちゃえ。

開放された両腕をタイちゃんの首に、ぶら下がるように回す。

体をピタリとすり寄せれば、タイちゃんもアタシの状況を分かっ
てて、直ぐに背中に腕を回してギュッと抱き返してくれる。

ああ、タイちゃんの腕の中って安心できて幸せかもお。

「…ん…っ…ん……」

アタシは差し込まれたタイちゃんの舌を軽く窄めた唇でチュプと吸い上げながら、舌先で彼の舌裏を撫で上げる。

これ、されると気持ちいいんだよね。

してるあたしも気持ち良くなってくる。

「…っ…ふう…」

いつもタイちゃんがしてくれるから今日はアタシがお返しするね。アタシだって積極的に気持ち良くなりたい日が、たまにはあるんだもん。

なんて甘い雰囲気にとろんとなりながら夢中になってたら、何やら唸るような声。

「キスだけじゃ我慢できねえ…」

という恐ろしい眩きが聞こえてきたから、さあ大変。

「ひゃんっ」

うわっ!!

耳たぶ、みみたぶ耳朶しやぶったあぁっ!!

「きゃあっ!!」

首筋、甘噛みしないでええっ!!

もしかして、アタシ。

やり過ぎましたか？

身の危険が迫ってますか？

うーん……。

色々な意味で危ないみたいで困ったなあ。

でも、今は離れ難いなあ……。

満月の夜は二人して理性の蓋が開きそうになるので要注意なの
です。

6 温かい掌

6 温かい掌

今日は珍しく一人でお出かけ。

少し前までお世話になっていた児童保護施設に、渡さなければならぬ書類があつて数ヶ月ぶりにやつて来た。

かなり古びた建物と枯れ柴の狭い庭。

お世辞にも快適とはいえない住環境だったけど、ここには数年お世話になっていて、いわばアタシの実家のような場所だ。

なのに何でかな。

少し離れてただけなのに、凄く空気が余所余所しく感じてしまう。何が違つてしまつたんだろう。

養護の先生に用事を済ませてから、アタシは自分が使つていた部屋に行つてみることにした。

建物三階の奥から二番目に住みなれた部屋はある。

同部屋の子が卒業してからは独りで使わせてもらつてたけど、今はどんな感じかな？

中学生組の誰かが部屋替えして入つてゐるかな？

昼間なのに相変わらず薄ぼんやりとした廊下を少しワクワクしながら進んでいく。

古びたノブを引く瞬間は、ちょっとした玉手箱を開けるような気分だった。

「あつ……」

けれどそれは潮が引くようにアタシの気持ちを現実に戻した。

明るい色のカーペット。

クレヨンの落書きで汚された机。

壁に張り付けられた花柄に切り抜かれた色がみ。

ベッドの上には子どもに人気のキャラクターがプリントされたタオルケットが無造作に広がっている。

そこにはアタシが記憶している物が何もなかった。
見事なほどに何もなかった。

「月ちゃんが園を卒業してから直ぐに小さい子が二人も入ったのよ」
振り向くとアタシの後には院長先生が立っていた。

「綺麗に使っていてくれたのに、アツという間にこんなに散らかってしまったの」

小首を傾げて少しだけ困った風の先生は、それでも子どもたちの事が可愛いとばかりに微笑んでいる。

その顔を見てアタシは思い出してしまった。

ここでの生活がどんなものだったのか。

何で忘れてたんだろう……。

他人に迷惑をかけないように、空気のように存在感を消して暮らしていた日々のこと。

ここには悪い思い出も良い思い出も何もないってこと。
人に関わらず、大勢の中に居ても独りきりだったから。

透明人間になりきってヒソソリと生活していたのだから。

アタシは院長先生への挨拶もそこに園を後にした。

気付いてしまったら居た堪れなくなつて、少しでも早く外の空気

を吸いたかった。

古びた形ばかりの門を抜けた途端に全身から力が抜けたようになってしまつて、アタシはその場に座り込んでしまう。あそこにはアタシが居た記憶が何も残っていない。

使つていた机にも。

使つていたベッドにも。

床にも壁にも。

もうアタシの帰る場所じゃないんだ。
もうアタシに帰る所は無いんだ。

この遣る瀬無さは何だろう。

今までだつて独りで居たじゃないか。

今までだつて心細さを独りで遣り過ごしてきたじゃないか。

「タイちゃんに会いたいな……」

寂しさを感じた途端、ふわりとタイちゃんの顔が浮かんできて、
気が付いたら無意識に呟きが零れてた。

アタシが存在していることを感じさせてくれるタイちゃんに無性に会いたくなつた。

「んじゃ帰るか」

頭の上のほうから唐突に声が降ってきた。

しゃがんだアタシの上に影ができたかと思うと、視線に先に現れた大きなスニーカーの爪先。

驚いて見上げると彼がアタシを見下ろしていた。

「タイちゃん……？」

何で、どーして此処に居るの？

今日は白百合の女のコとデートじゃなかったの？

園に行くの付き合っつてお願いしたら、面倒くさいからやダッて言っつたのに。

もしかして……。

「……デート上手くいなかったの？　また飽きて捨ててきちゃったの？」

居る筈のないタイちゃんの姿に安心して、思わず減らず口を叩いたら速攻でグリグリ梅干をお見舞いされてしまった。

うーん、案外凶星だったのかな？

「行くぞ」

タイちゃんはアタシが立ち上がるのを待たずにさっさと駅に向かって歩き出す。

アタシは慌ててその後を追いかける。

急がないとタイちゃんのコンパスは大きいから、アッという間に置いていかれちゃう。

今日は背中を見せられるの寂しいよ。

肩を肘掛がわりにしても今日は文句言わないから置いていかないでよ……。

「待つてよお」

小走りでタイちゃんに追いつき様に彼の学生服の裾を掴む。

ペシッ！

瞬時にその手を払い落とされる。

「そんなところ握るな」

うわーん、鬼！

少しくらいイイじゃないさ。

仕立ての良い服に皺がよるのがそんなに嫌なの！？

いつもなら気にせずにブチブチ文句を垂れるところなのだけど…

…。

今日のアタシはその余裕も元気もなくて。
何だか凄く悲しくなってしまうて。
自然と足は止まってしまっていた。

きつと泣きそうな顔をしていたんだと思う。

タイちゃんがニヤリと笑って私の元に戻ってきた。

「違うだろ」

おもむろにアタシの目の前に手を出す。

「掴むならこっちだろ」

タイちゃんはアタシの手を勝手に握ると、また勝手に歩き出した。
アタシもいつものように少し引きづられるように並んで歩きだす。

タイちゃんが何で目の前に現れたのか、アタシはようやくわかった。

タイちゃん、お迎えありがとう。

キュツと握ってくれたタイちゃんの掌は、大きくて温かくて。
心細かったアタシに温もりが灯をくれた。

アタシには新しく帰る場所ができたから、もうここには来ること
はないと思う。

7 同居のススメ

7 同居のススメ

アタシは寝起きが良いほうだと思う。

目覚ましを二秒以上鳴らしたことがないくらい。

田舎で暮らしてた小さい頃は、おばあちゃんと一緒に鶏の声を目覚まし代わりにしてた。

保護施設に入ってから、団体生活のせいかやっぱり早起きが続けてた。

大勢で暮らしていると、トイレやら洗面場の順番で苦労するのよね。

あの戦争に巻き込まれないためには、皆が起きて来る前に仕度を済ませるのが一番。

やっぱり早起きは三文のトクってことだね。

それは里親さんの家に移っても変わらない。

自然と身に付いた習慣というのは根強いもので、今だにアタシの早起は続いている。

あんまり早過ぎるとお手伝いさんが困った顔をするので、これでもだいぶ遅くなったほうけどね。

このところ夏が近いせいか寝苦しい夜が多いから、起きて朝一番にバスルームに飛び込むのはアタシの日課。

朝が早いと時間が贅沢に使えてホントお得感満載だね。

それに年頃の女子高生がパジャマでウロウロするのは憚られるので、朝シャワーは早い時間に使うように心がけてたりする。

里親さんの家は大きいからアタシ一人くらい増えても余裕のある
広さだけど、他人同士が円滑に生活するためには気を遣わないとね
ダメだよな。

今朝も起きて直ぐにバスルームへ。

少し熱めのシャワーを頭から浴びると、アタシのポヤヤン頭（タ
イチちゃん命名）もだいぶマシになってくる。

気持ちが良いなあ。

「おう。早いな」

バスルームの扉がいきなりガチャリと勢いよく開けられた。

呆然。

一瞬後に絶叫。

「ぎゃあああああつ！！！！」

入口にはマツパのタイちゃんが立っていた。

集団生活におけるアタシなりの気遣いを全く解さない人物が、そ
の努力を嘲笑うかのように登場したのですう。

そう。

アタシは今タイちゃん家にお世話になっている。

去年の事件あれこれから正式に引き取られて早数ヶ月。

とは言うものの養女とかじゃないから、苗字は別々のまま。

「な、何で今日に限って、こっちのバスルーム使おうとするのよお
！？」

アタシの叫びにタイちゃんは少し機嫌悪そうな顔になる。

「シャワーの音してたでしょ？ 何で入ってくるのよお」

あ。眉間には皺が寄った。

怒りたいのはアタシのほうなのに。

だいたいにして、このお家には他にもバスルームがあるんだよ？
人が使ってる所を襲撃しなかったっていいじゃないと思うのはア
タシだけ??

「とにかく戸閉めて他に行つてえ！」

「メンドクサイ」
むきいいーつ。

「タイちゃん、アタシたち他人同士で年頃の男女なんだよ?!
しかもアタシは嫁入り前の乙女なんだよ?
そんなアタシの裸を見て良い筈がなあーいつ!」
髪の中のリンスを流しながら思わず怒鳴る。

「お前だつて俺の裸見てるじゃん、今」

しまった……。
無意識にタイちゃんジュニアに目がいつてしまつてたっス。
うーん、ノーコメント。
とにかく、アタシの精神衛生上、一刻も早く他へ行つて欲しいの
だけだな。

そんなアタシの気も知らず。
タイちゃんは、上から下まで往復じっくりアタシのことを眺めて
から

「安心しろ。今のお前じゃ満月でもない限り襲う元気が湧かない」
とか言いやがりました。

ヒドイ。

健康な高校生男子の朝のセリフとは思えないです。
前にクラスの男子たちが
「女だつたら還暦までOK」

って話してたよ？

アタシ、ピチピチなのにそれ以下ですかあ！？

「ツキ。もつと牛乳飲め」

タイちゃんは謎の言葉を残して、バスルームの扉を閉めると去って行った。

うわーん…。

アタシの清々しい朝を返せええ。

「グレてやる。ドカ食いして太ってやる。

タイちゃんなんか、丸太のように太ったアタシをチャリで送る刑なんだから」

玄関横の車庫からスポーツタイプのチャリを引いて出てきたタイちゃんに、アタシは膨れっ面で抗議する。

勿論、軽くスルーされちゃったけど。

今年の春からアタシはタイちゃんと同じ高校に転校してて通学は自転車。

といっても漕ぐのはアタシでなくタイちゃんなのだ。

バスでも通えるんだけど、タイちゃんはアタシを一人で通学させたがらなくて、必然的にチャリに二人乗りして通ってる。

変なところで過保護なんだか、何なんだか…。

ホントは二人乗りは禁止なんだけど、のんびりした町のせいかなマワリさんに今のところ遭遇したことがない。

なのでちよっとハシタナイけど、横乗りじゃなくタイちゃんの肩に掴まって立ち乗りが毎日の通学ス　タイル。

タイちゃんよりも目線が高くなる唯一の時間はアタシのお気に入りなのだ。

今日はとっても天気が良い。

空が青くて夏が近いんだなあって感じる。

二人を乗せた自転車はグングン加速して、過ぎていく風が気持ち良い。

チャリを漕ぐタイちゃんの首筋からは、アタシと同じボディソープの香りがフワリとしてる。

アタシは何だか嬉しくなって、彼の肩を包むように腕を前に回して抱きついた。

「ツキ。」

「なあに？」

「お前、死ぬほど牛乳飲め」

「何で牛乳？」

「目指せホルスタイン。少しは胸に栄養送れ」

……。

……………。

「タイちゃんの、あんぽたんーっつー!!」

長閑なサイクリングロードにアタシの絶叫の尾をひきながら、チャリはその後ろも快走を続けたのでした……。

8 同棲との境界

8 同棲との境界

タイちゃんとアタシが一緒に住んでることバレちゃいました。

今日は生憎あいにくの雨。

チャリはお休みしてタイちゃんと二人バス通学。
それ以外は、いつもの朝。
いつもの登校風景の筈だったんだけど。

学校に着いた途端昇降口でワラワラと女のコたちに囲まれちゃいました。

あれれ？

アタシ、こんなにお友だち居ない筈なんだけどな。
なんて暢気に思ってたら……。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど」
って怖い顔をした女のコに詰め寄られてしまって、生きた心地しませんでした。

反友好的熱烈歓迎の雰囲気満々の空気。
事なかれ主義のアタシは思わず魂飛ばしそうになりましたよお。
タイちゃんは自分に関係ないとかかりに、アタシを置いてさっさと自分の教室に向かったっちゃうんだもん。
相変わらず冷たいったらないよ。

普段は愛らしい筈の女性陣たちは鬼のような形相。
「あんたと大地が同棲してるって聞いたんだけど」

って。

お家の人は留守がちだけど、二人で暮らしてる訳じゃないから同棲とは違うと思うな。

エッチも未遂だしね。

養女じゃないから家族じゃないし、かと言って唯の同居人でもないしなあ。

複雑な背景を説明すのも面倒だしなあ。

そもそも。

名前を呼び捨てにする仲なら、タイちゃんに直接聞いたらいいになるあ。

でも呼び方「ダイチ」って間違えてたくらいだから、そんなに仲良くもないのかな？

よって。

「その件につきましては、タイちゃんから放課後に発表があります」と、その場しのぎの言い訳でアタシは脱兎しちやいました。

たまにはタイちゃんにバトンタッチなのだ。

いつかはバレるかなあとは思ってたけど意外ともった方かな。

同居して数ヶ月だもんね。

でもどこからバレたのかなあ。

確かにチャリに二人乗りして通学してるけど、それだけのネタじや直ぐに同居とは考えつかないよね。

教室に入ると噂に詳しいクラスメートが教えてくれた。

ナンとタイちゃんの熱烈なファンのコが家を張ってたんだって。しかも、一日じゃ確証持てないから何日も張り込んだんだって。

将来は優秀な刑事か、ストーリーカー犯罪者だね、きつと。

今のご時世、個人情報管理は厳しい筈なのに、住所は何処から

漏れたのかなあ。

学級名簿とか、連絡網とか無いしなあ。

アタシたちの後は付けてこれないだろうしなあ。

タイちゃん他他人の視線とか気配に鋭いから、付いてくる人が居たら絶対気付くだろうし。

チャリの後を追うのも無理だろうなあ。

タイちゃんの脚力ハンパないから、途中の坂道で絶対ブツチされちゃうこと間違いなし。

学校は一時騒然って感じだったけど昼休みには噂は鎮火していた。神也大地同棲発覚のスクープ騒ぎを先生たちも放置しておく訳にはいかなかったみたい。

当然のことながら正当な理由を以って収める必要があったんだろうね。

アタシが施設からタイちゃん家に里子としてお世話になってるってことを騒いでた生徒たちに話したみたい。

しょうがないよねー。

あのままだとPTAとかで問題になりそうな勢いだったもん。副産物として、一部の生徒から何やら同情めいた視線を感じるようになってちゃったけど。

これでタイちゃん絡みの攻撃が減ってくれば安いもんなのだあ。♪

実のところは。

アタシのハードでディープな状況だけでなく、ダイパパが学校側に「息子の婚約者なので仲が良いのは目を瞑ってください」

なんて恥ずかしい嘘を、アタシが転入する時にお願いしてあったんだとか。

夕飯の時に、ヨウちゃんからこの事実を教えてもらって、アタシは目も気も遠くなりそうだったよあ。

タイちゃん家は名家だから、学校への黄金の菓子もたんまりだか

らね。

やりたい放題だね……。

「あんたと一緒に住んでる理由は分かったけど、だからって始終そばに居る必要はないでしょ」

帰り間際、懲りずにアタシたちを囲んだ女のコたち。

今回はタイちゃん込み。

一緒に帰るから逃がさないもんね、クツクツクツ。

「このコは大地の何なのよ？」

何と問われて思わず二人して顔を見合わせた。

二人の間には一言では語れない事情がテンコ盛り。

一緒に住んでるけど家族じゃない。

キスはするけど恋人同士じゃない。

ホント、タイちゃんにとってアタシは何なんだろう。

「……甘くて、喰うと力が出る栄養剤。」

首を捻ってたタイちゃんがポツリと答えた。

……。

うーん……。

聞き様によつてはヒジョーに意味シンですう。

囲んでいる女子生徒たちは、何だか勝手に深読みしてるみたいで、心なしか頬が染まってますよお。

否、そんなホットな意味じゃないから。

えっと、そのままの意味というかね。

……ま、いいか。

この隙にとつと帰ろう、タイちゃん。
雨も上がったしね。

二人の関係って本当に何なんだろうね。
説明するのって今のアタシには難しい。

アタシにとってタイちゃんは何なんだろう。

家族候補って言ってしまったら凶々しいって怒られるかな？
タイちゃんみたいな可愛くない兄弟は遠慮したいしなあ。

ただの同居人？
それよりは近い人なのは確か。

タイちゃんにとつても同居人以上だといいな。

9 抱きしめて眠ろう【大人表現有】（前書き）

この頁は【大人表現有】です。
問題のない方のみ続きをどうぞ。

9 抱きしめて眠ろう【大人表現有】

タイちゃんとアタシ 9 抱きしめて眠ろう【大人表現有】

「ツキ、眠れないのか？」

キッチンで冷たい水を飲んでいたアタシに不意に声がかかる。
振り向くとタイちゃんが上半身裸に半パンという姿で立っていた。
相変わらず足音させないんだね。
ビックリして思わず声上げそうになっちゃったよ。

シャワー上がりなのか髪の毛がしっとり濡れてる。

無駄に色気ムンムンだあ。

均整がとれてて綺麗だなあ。

盗撮して学校で売ったら財産築けそうだなあ。

そんなアタシの野望も知らずに、タイちゃんはタオルでガシガシ
と頭を拭きながら冷蔵庫に向かう。

ガチャリ。

手にしたのはビールの500ミリ缶。

……。

何も言うまい。

「早かったね。明日お休みだから朝帰りかと思ってたよ？」

週末はたいいていフラリと遊びに出て、朝方まで帰らないからホント珍しいね。

タイちゃんは交友関係が広いから週末はモテモテくん。
たまにタイちゃんを取り合った女のコ同士が争っちゃうほど。
この間はケンカに巻き込まれて腕を引っかかれてのご帰還だっけ。
人気者は辛いねえ。

「お前のほうこそ、こんな時間に起きてるの珍しいな」
言われてみれば。

何たって鶏と一緒に起きるような生活が基本だから、毎日寝るのも早いんだよね。

普段だつたら休み前でも確実に就寝してる時間。

でも今夜は……。

「一度寝ただけで、変な夢見て起きたら寝れなくなっちゃった」
どんな内容だったかは憶えてないんだけど、自分の唸り声で起きたくらいだから楽しい夢じゃなかったみたい。

タイちゃんは「ふーん」って興味なさそうな返事。

でも自分が飲んでいたビールを手渡してくれた。

元気出せ、つてところですかねえ。

普段なら飲まないんだけど……、今日はいいかな？

明日は学校ないしね。

ゴクリと一口。

むむ。

「やっぱり苦くて不味い……」

これじゃ気分転換にならないよお。

アタシは思わず眉を八の字にしてビールを丁重にお返ししてしま
う。

「大人の味は、まだ無理か」

まだ無理っていうか、多分ずっと無理ですう……。

ちよつと鼻で笑ったけど、タイちゃんは改めて冷蔵庫からフルーツカクテルの缶を一本出してくれた。

どれどれ、どんな感じかな？

わーい♪

「美味しーい！」

初めて飲んだけど葡萄^{グレープ}の炭酸ジュースみたいで、これなら飲めそう。

こんなに美味しいお酒があるなら、一生大人の味のするビールは飲めなくていいや。

コクコクと何口か飲んでしまうと途端に顔がポワンと温かくなる。飲みやすいけど、やっぱりアルコール入ってる証拠だね。

「ツキ」

「ん？」

「サンルーフで飲も」

そうだね。

キッチンで立ち飲みもナンだよな。

返事をする前にタイちゃんがビールを持ってない方の手でアタシの手を引く。

そこは3階にあるタイちゃんの部屋近くの階段から上がったロフト部屋。

屋根が斜めに切り立っていて、夜空を眺めるのに最高の場所なの。このあまり広くない感じがアタシは好き。

部屋に入るとタイちゃんはロウソファーに座った。

アタシも定位置になってる足元のクッションに座ろうと思ったら、腕を引かれてアツと言う間にタイちゃんの足の間に座らされた。

あれだな。

二人して同じ方を向いてるからカンガルーの親子のような感じ？
このソファアは座る部分が深くて、二人で座っても落っこちる心配がないからいいけどね。

座り心地が良いから床のクッションの上より楽かも。

「ツキ」

タイちゃんはビールを握っていないほうの腕を後ろからアタシのお腹の辺りにまわす。

一拍措いて。

「どんな夢だった？」

少し気遣^{きづか}ってるような声色。

そっか。

さっきから何か言いたそうな雰囲気だったのは、それが聞きたかったんだね。

心配してくれたんだね。

前にアタシが何度も怖い夢に魘^{うな}されて叫びながら起きたのを目撃してるから。

「大丈夫」

回された腕にアタシは自分の掌を乗せる。

「大丈夫だよ」

タイちゃんの胸に寄りかかりながらもう一度言っ。

「あの夢じゃなかったよ」

あの夢だったら起きても憶えてる筈だから、忘れてるって事は違うってことなんだと思うの。

「そっか」

やっとホッとしたみたいで、タイちゃんは小さく息を吐いた。

耳元で喋られると普段は擦ったく感じるんだけど、今夜はフワフワと気持ちがいい。

お酒が入ってるから？

タイちゃんの声が優しいから？

「お前、顔が赤いぞ」

言われてみれば少し目の前が揺れてるかな？

「そろそろ止めとけ」

タイちゃんは自分のビールを飲み終わると、アタシの手から缶を取り上げてそれも一気に飲んでしまった。

むーっ。

もう少し飲みたかったのにい。

でも。

振り返って睨んだタイちゃんがボヤケて見えるってことは……。もしかしてアタシ酔っ払ってる？

チュツ。

一生懸命に眼を凝らして見上げてたら、不意にキスされてしまった。

ポツて一瞬にて顔が火照る。

続けて唇を舐められて。

湿った感触が生々しくて体がブルッと震えてしまう。

「ふ……っ……」

抗議しようとしたらスルリと舌を入れられてしまったあ。

触れられた場所からジンわりと気持ちよさが浸透していく感じ。

むむむ。

しまった。

これは慣れ親しんだ済し崩しの王道パターンでは!?

「や……あ……」

一応、抗議の声は挙げてみるものの見事にスルー。

そうですか。

やっぱり却下ですか……。

それにしても。

まるで満月の夜のようなキス。

こんなにディープなの珍しくない?

「ん……っ……」

気持ちイイ……。

ゆっくり口の中を撫でられるの好き。

いつもより今夜のタイちゃんのキスは甘いのは気のせいじゃないよね。

まるで舐めとるように丹念に舌が這っていく。

アタシはドキドキしちゃって、タイちゃんの服に掴まろうとしたけど……。

タイちゃんてば裸なんだもん、困っちゃうよお。

「ふぁ……」

この香りはグレープ?

さっきのカクテルの味だね。

もしかしてタイちゃんもアタシの口を甘く感じてる?

「月……」

お腹に回ったタイちゃんの腕が知らない内にアタシを抱きしめる。

大きな掌はウエストから脇へと移動して……。

「あ……」

不意にアタシの胸を掠めた。

「やあ……あ……っ」

ビクツと身を竦めた反応に気を良くしたみたい。

事もあるつかタイちゃんは、アタシの小さな膨らみを大きな掌で覆ってきた。

「アアッ……」

思わず声が漏れちゃう。

ダメだよ、タイちゃん！

そんな風に撫で回さないでえ……。

キス以外の接触は反則だよお。

アタシを抱えてる体を押しやろうとして、タイちゃんの胸に手をついたのはいいいけれど。

掌から伝う素肌の感触にドキツとしてしまって、思わず抵抗を止めてしまった。

だって肌がシットリしてて筋肉が硬くて、触り心地良かったんだもん。

気を抜いたらアタシの方がサワサワと撫でてしまいそう。

乙女なのに変態の扉を開けちゃいそうでマズイよお。

タイちゃんがキス以外の事をアタシにするなんて珍しい。

強引乱暴者のくせに割とオトナな理性持ちだから、アタシが本当に怖がるような事は絶対にしない。

なのに今夜はネジが少し飛んじやったみたい。

お酒の威力恐るべし！！

「……や……っ」

あまり揉み応えなんて無い筈なのに、感触を気に入ったのか、やたらヤワヤワと撫で回す。

嫌だよお。

何だか変な感じだよ。

体がジワッて熱くなってきた。

胸なんて触られたって恥ずかしいだけだと思ってたのに…。

何も感じないと思ってたのに…。

アタシ、もっと触られたいって思い始めてる…。

その上。

「ひゃ……ッ」

自己主張し始めた先端を布越しに摘まれて、体によく判らない電流が走った。

しまった！！

寝てたからブラ着けてないんだった！！

掌で揉んで、指の間に挟んで摘んで。

タイちゃんは留まることなく好き放題。

マズイよお。

このままじゃ絶対マズイ！！

「タイちゃん、胸ダメえ！ 反則うう！」

パジャマの裾から手を這わそうとしていたタイちゃんの腕を必死でアタシは止める。

直接触られたらシヤレにならないよお。

心臓破裂で救急車だよお。

タイちゃんの理性カムバック！！！！

総動員でカムバアーーック！！！！！！

「……」

タイちゃんは少しムツとしたように眉間に縦皺を刻むと、少し唸ってやっと手の動きを止めた。

「仕方ねーな。」

言いながら力が抜けたようにソファに横たわり、アタシを自分の体の上に乗せるように抱き込む。

「このまま一緒に寝るだけで許してやる」

ふー……。

とりあえず命拾いですう。

でもお布団なしで平気かな？

寒くないから大丈夫かな。

というかアタシを上に乗せてたらタイちゃんが疲れちゃうと思うんだけど……。

「魔うなされてたら起こしてやる」

小さくタイちゃんが呟いた。

そっか。

なら甘えておこうかなあ。

もう怖い夢は見ないと思うけどね。

タイちゃんを抱きしめてれば悪夢も逃げてくよ。

ありがとね、タイちゃん。

10 美人来襲

10 美人来襲

タイちゃんが笑っていた。
包み込むように優しい顔で。

初めて見たよ。

タイちゃんの怖くない笑顔。

その人がとっても大事なんだね。
その人がとっても好きなんだね。

二人が並んでいる姿を見てドキリとした。

あのヒトの肩にタイちゃんの手が触れたのを見て、何故だか心臓が早鐘のように鳴った。

軟らかそうな栗色の長い髪。

長い睫に彩られたパッチリの目。

女性らしい丸みと長い手足。

「貴女が月ちゃん？　これから長いお付き合いになると思うの。宜しくね」

優しい声色。

艶やかで色つばい唇は紅くて。

大人の女のヒト。

特徴のないアタシからしてみたら理想的な、というか別世界の人のよう。

ダイパパが言ってた。

あのヒトは一族の遠縁に当たるんだって。

望まない縁談話しが持ち上がったのを相談したくて訪ねてきたんだって。

ヒロ兄が言ってた。

昔、ヒロ兄の婚約者に名前が挙がったことがあったんだって。

結局はヒロ兄が恋愛結婚を望んだこともあって縁ができなかったんだって。

ヨウちゃんが言ってた。

あのヒトはタイちゃんの初恋の相手なんだって。

その頃のタイちゃんは小さかったから相手にはされてなかったみたいだけど。

驚きだよ。

俺様なタイちゃんにも初恋はあったんだね。

小さいタイちゃんは、本当は自分が婚約者になりたかったのかなあ？

今ではすっかり大人の風貌のタイちゃん。

二人で並んでもお似合いになった事、タイちゃんも自分で気付いてるよね。

それにしても。

タイちゃんてば本当にメンクイだったんだね。

普段から美人さんと仲良いけど、あのヒトが初恋じゃ理想が高く

なつていく訳だね。

彼女ができない訳だよ。

驚きだよ。

俺様なタイちゃんでも初恋の人は特別なんだね。

夕暮れの庭先。

二人は立ってた。

見てしまった。

あのヒトとタイちゃんがキスしてた。

今までだって、たぶん他の女のコたちともキスしてたと思う。
アタシとも挨拶代わりだったしね。

けれど。

意味は違う。

きつと違う。

あのヒトはアタシと違ってタイちゃんのサブリじゃない。
栄養補給にならないのにキスするのは……。
そこに感情があるから。

タイちゃん、蕩けそうに優しい顔で口付けてた。

本気で好きなヒトにする時は、そんな顔するんだね。

重なる二つの影を見ていられなくて、アタシは気がつくとその場
を離れてた。

どうしよう……。。

本気で好きな人が居るなら、アタシとキスなんかしてて良いのかな？

良い筈ないよね。

今までと同じ関係で良いのかな？

良い筈ないよね。

たとえ理由があっても。

そんなの間違ってる気がするの……。

二人はこれからどうするんだろう。

アタシはこれからどうするんだろう。

11 キスのない日常

11 キスのない日常

タイちゃんがアタシにキスしなくなった。
タイちゃんがアタシに触れなくなった。

今は夏休み。

学校に通わないアタシたちの距離は日に日に開くばかり。

元々広いお家だけど今は更に広く感じてる。

まるで独りきりで生活しているよう。

まるで園で暮らしている時に戻ってしまったみたい……。

きっかけはアタシの一言。

梅雨の終わりの少し蒸し暑い夕暮れ時。

花壇の水撒きをしているアタシの後ろで、タイちゃんはサンルームの端に座りながらポカリを飲んだ。
それはいつもの日常の一コマ。

あのヒトがゲストルームに泊まるようになって、相変わらずアタシの近くにタイちゃんは陣取ってた。

キスしてくるのも変わらない。

だからあの時、タイちゃんが後からアタシを抱きしめてきたのも日常の一コマ。

でもアタシには違ってた。
いつものようにタイちゃんの手が頬に触れた時、アタシは突然の
ように意識してしまったの。

あのヒトとタイちゃんのキスシーンを。
瞳に焼きついたあの光景を。

同じこの場所だった。

同じ夕暮れだった。

二人はお似合いで。

まるで恋人同士のように。

だから唐突に気付いてしまった。

ここでキスしていいのはアタシじゃないんだって。
恋人じゃないアタシがしたらダメなんだって。

気付いたらアタシは初めてタイちゃんのキスを拒んだ。
降りて来たタイちゃんの唇に指先を当てて止めちゃってた。

「もうキスするのは止めよう？」

思い切ってそう告げたら、タイちゃんは怪訝顔になった。
でも無理強いはいしないでその腕を解いてくれた。

タイちゃんは優しい。

強引そうに見えて実は凄く優しい。

だからタイちゃんの腕から逃れるのは、案外簡単なことだったん
だと今更ながらに気付いた。

かわそうと思えば今までだってかわせたんだね。

だって呆気ないほどに二人の間には隙間ができてる。

「どうした？」

薄っすらとかいた汗で、額に貼り付いてるアタシの前髪を指で払ってくれながら、タイちゃんが真っ直ぐに見つめてくる。

だからアタシも、ちよつと首が痛いけどタイちゃんを見上げて真っ直ぐ視線を返した。

「ここであのヒトとキスしてたよね」

タイちゃんは一瞬不思議そうな顔をしたけど、直ぐに何の事が分かったみたいに目を眇めた。

「それがどうした」

「タイちゃんは平気なの？」

あのヒトとキスした場所でアタシと同じ事して」

タイちゃんは一瞬驚いたような顔をしたけど、直ぐにいつものように皮肉めいた笑みを口元に浮かべた。

いつものイジメっ子の笑み。

「お前とするのは意味が違う。気にするな」

うん、そうだね。

アタシとは意味が違うね。

でも気不味い思いをするのはアタシなんだよ？
だってあのヒトは多分知ってる。

『いつも一緒にいるのね。仲良しさんね』

この間、あのヒトはそう言って、アタシの唇をそつと撫でた。
それで分かったの。

ああ、見られたんだって。

ああ、気にしてるんだって。

だからもう決める。

もうタイちゃんとはキスしないって。

「わかった。ツキがそれを望むなら好きにしたらいい。
俺も丁度、お前とは一緒に居られなくなるところだったから」

タイちゃんは何でもない事のように捨て台詞を残すと家の中に入
っていつてしまった。

でもアタシはその言葉に思わず息が止まった。
心臓が止まらなかったのは奇跡だと思う。

それってタイちゃんとキスしなくなったら、もう一緒に居られな
くなるってこと？

もう仲良く暮らす事はできなくなるの？
キスをさせないアタシには、かまってられないってこと？
頭の中がグルグルして呆然とアタシは立ち尽くしてしまった。

その時は何でこんなにショックを受けたのか思いつかなかった。
けど理由は直ぐに現実を伴って突きつけられた。

タイちゃんがアタシにキスしなくなった。
タイちゃんがアタシに触れなくなった。

そしてこの家でアタシは独りになった。

12 自分の中の妖精

12 自分の中の妖精

「ツキちゃんは、このまま戦線離脱？」

爽やかな朝のダイニングルーム。

ヨウちゃんは爽やかな声でアタシに問うた。

二人でとる朝食は久しぶりだね。

此処からは少し遠い男子校に通っているヨウちゃんとは生活時間が合わなくて、滅多に朝ごはんは一緒にしないからねえ。

テーブルの上には朝御飯正統派鮭定食&アメリカン・ブレックフアーストが美しくセッティングされている。

ああ幸せ♪

お手伝いさん方、いつもありがとうございますう。

「ねえ、奪ったり、脅したり、夜這いとかしないの？」

タイちゃんと同じ作りとは思えないキラキラした笑顔で更に問う。笑ってるヨウちゃんって無駄にハンサムだわあ。

お茶碗を持つ手もキマってるわあ。

あ。

ふわとろオムレツ美味しい！

チーズ多目にしてもらって正解だわあ。

パンに乗せて食べちゃおう♪

「…ツキ。」

あれれ。

何か冷りとした空気が……。

「無視するとはイイ度胸だね」

チラリと前方を盗み見ると、そこには。

ぎゃーっ！

あ、悪魔が、悪魔が目の前に居ますうう！

「答えないと、泣かすよ？」

「あうう。」

天使からバージョン変更したヨウちゃんの笑みはメチャ恐ろしかった。

アタシは思わずフォークをテーブルに戻して石コロのようにカチンコチンになる。

普段温和な人が怒ると怖いよお……。

「で？ お前たち、付き合ってるんだろ？」

心なしかいつもより語尾が乱暴なんです。

性格、変ってませんか？？

だいたいにして。

何でさっきからんな事ばっか言つのよお。

「付き合ってない」

アタシは少し拗ねたな声で返事する。

「じゃあ何？ セフレ？」

「…違う。」

更にヒネた声で答える。

「まさか。まだ最後までシタ事ないとか言わないよね」

「……………」

とうとうアタシは答える気になれなくて黙り込んでしまっ。

うわーん！！！

まさか、って……。

まさかって、どーゆう意味よお。

ヨウちゃん、アタシの事そんな風に見てたのぉ？！

てか、そんな恥ずかしい事チェックしないでよぉお。

いくらタイちゃんと双子だからって、一緒に住んでるからって話したくなぁぁい！！！！

でもアタシの気持ちなどヨウちゃんはお構いなしみたで……。

答えないならお仕置きだよ、って微笑んで……。

アタシの前に魔の手を伸ばしてきた。

「あああつつつつ！！！！ アタシのベーコンがあー！！！」

ヨウちゃんの形の良い大きな口に、肉厚な一切れがペロリと吸い込まれてくう！！

酷いよお。

楽しみにしてたのに酷いよぉー！！

「で？ どうなの？」

答えないと、どんどん食べる物がなくなるよ？」

追い討ちをかけるようなヨウちゃんの笑顔。

プチ。

今、何か音がしました。

アタシの中で何かが切れました。

「うるすわぁーいつ！！」

タイちゃんとは付き合ってないし！ セフレじゃないし！

エッチだつてしたことないもん！ 未遂ばつかだもん！
てか、アタシはまだ処女だぁぁーっ！！！」

ふーっ…

ふーっ…

ふーっ……。

しまった。

乙女らしくもなく、朝の風景に似つかわしくない言葉を絶叫しちやったよお。

食事中なのにマナー悪いことしちゃった。

でもヨウちゃんが変な事を聞くのが悪いんだからね！！
謝らないからね！！

そんな激昂直後で鼻息の荒いアタシに向かつて、
「処女かどうかまでは質問してないからね」
って。

天使のような微笑を浮かべながら一言おっしゃいましたぁ……。
うっう。

もう何処かに穴を掘って埋まりたいい。

その後の食事タイムはメチャ気まづかった。

残すのはバチが当たるから、速攻で全部食べて席を立つちゃう。

「ツキ。」

「……なに？」

「別にツキちゃんを困らせたくて、あんな質問したんじゃないんだよ？」

さっきまでとは違う感じの声。

思わず振り返ると、少しだけ困り顔でヨウちゃんが立っていた。

「…じゃあ、何で？」

「……気付いてないのか」

「？」

「タイがツキちゃんを選ばないなら…、俺が必然的に君を引き受けることになるだろうね」

言われて。

アタシの頭は瞬時にして冷えた。

そうか。

「そういうことだったんだね…」

アタシがこの家に居る意味。

それを考えれば当然のことだよな。

だからヨウちゃんは聞きたがった。

タイちゃんとの関係を確認したがったんだ。

アタシがこの家で成すべき事は唯一つなんだから。

神也の子孫を生すことなんだから。

「困ったなあ…」

「俺じゃ困る？」

「うん。だってヨウちゃん、タイちゃんよりも更に女のコにダラシナイもん」

タイちゃんと同じ作りの顔だけど、当たりが柔らかいヨウちゃんの方が倍モテるんだよねえ。

そんなヒトと一緒に居たら、アタシ、いつ襲撃されるか怖くて落ち着いて暮らせないよお。

「俺は誰にでも優しいけど、誰にでも冷たいし気楽だと思うよ？」

「うーん、それってアタシにも優しくて冷たいって事でしょ?」

「ツキちゃんは別。家族だから大事にしてあげるよ」

そう言ったヨウちゃんの瞳は優しくて。

本気で言ってくれてるんだなって思った。

心配してくれてるんだなってわかった。

「それに俺の心には誰も居ないから、もしかしたらツキが一番になる日が来るかもしれないよ」

ふふふ。

それはかなり魅惑的な未来かもお。

アタシだって女のコだもん。

誰かを一番に想ったり、一番に想われたりしたいよ。

その点、あんまり優しく見つめられた事ないからヨウちゃんの眼差しは魅力的。

いつもドキドキしちゃうこと間違いなし。

「試してみようか、キス」

「えっ?」

「大地としか経験ないんでしょ?」

戸惑うアタシを他所に、言うなりヨウちゃんに腕を引き寄せられた。

「よ、ヨウちゃん…?」

焦って見上げると視線がぶつかる。

ドキリとした。

だってタイちゃんと瞳が似てたんだもの。

カレノ ヒトミハ イルヨウニ スルドイ…

綺麗な鼻筋と顎のライン。

アタシにキスしようと告げる唇まで似ていて……。

ケレド ケンシハ ナイナ…

体つきだつて同じくらい。

そつと背中に回してくれる優しい腕さえも。

ツヨク アンシンヲ クレル ウデシカ シラナイ…

優しく抱きしめてくれるヨウちゃん。

そしてゆっくりと唇が降りてきた。

ホントニ イイノ…？

コノヒトハ カレデハ ナイヨ…？

「ツキちゃん…」

ヨウちゃんのまとう清涼感のある香りがフワリとアタシを包んで……。

「ふえ…っ…」

この瞬間の事をアタシは忘れない。

多分、一生忘れない。

だつて。

違うと思つてしまったから。

違つと分かつてしまったから。

カレニ ニタヒトナンテ イナイ

「…う…う…う…」

途端に涙が堰を切ったように流れだす。
ポロポロって次から次へと。

体って正直だ。

自分が欲してるものをちゃんと理解してる。
自分が悲しいと分かって悲鳴上げてる。

「よ、よ、ヨ…ウ…ち…ち…ち…」

「つ、ツキちゃん!？」

突然泣き出したアタシを見てヨウちゃんはメチャ驚き顔。
無理もないかあ。

今まで色々あったけど滅多に泣かないもんね、アタシ。

「ア…アタ…ご…ご…」

「日本語になつてないけど、なんとなく解ったから」
溜め息と共にヨウちゃんはアタシの背中をポンポンしてくれる。

ゴメンね、ヨウちゃん。

ゴメンね……。

ヨウちゃんは素敵なんだよ!
ホントだよ!

ただ…、アタシの趣味が悪かったで……。

「ふえ…うつ…っ」

「ああもお、泣かない泣かない」

「だ、だ、だっ…でえ…」

ヨウちゃんは困り顔で

「涙だけじゃなくて鼻水も滝だよ?」

なんて嬉しくない事を指摘してくれながらも、自分のＴシャツの裾でグシャグシャと拭ってくれた。

うー。

余計不細工になるから泣かないように気をつけてたのにい。

変な顔、見られちゃった。

恥ずかしいよお。

でも我慢できなかった。

アタシは、アタシの中の声に気が付いてしまったから。

もう一人のアタシに。

今までだってカノジヨはアタシの中で暴れてたんだと思う。

「自分のキモチにフタをするな！！ 我慢するな、あほう！！」
って叫んできたんだと思う。

でなきや、こんなに切なくて苦しくて辛い涙が止め処もなく出てくる筈なもの。

アタシの中に住む妖精さんは結構ハゲシイ性格らしい。

「ツキちゃんの中で答えが出たみたいだね」

連れてこられたリビング。

手渡してもらったティッシュで何回も顔を拭いて鼻をかんで。

やっと落ち着いてきたアタシに、ヨウちゃんは少し安心したかのように笑った。

「あのね…」

今更かもしれないけど…」

一世一代の決意を胸に顔を上げる。

「アタシね、根性出して足掻いてみる。自分の気持ち、伝えてみる」
欲しいものに気付いてしまったから。
もう知らないフリはできないから。

「自覚した途端に失恋の可能性大だけど……」

我ながら自分の無謀さに目眩がしそうだけどねえ。

タイちゃんの事だからフル時はバツサリ袈裟懸けだろおなあ……。
凹むだろうなあ。

てか、既に凹み気味だけど…。

「こらこら。」

今からフラれた時のこと想像してブルーになってるんじゃないよ」
気も目も遠くなりそうになったアタシをヨウちゃんが苦笑いで引き戻してくれる。

「そんなに気負うことないよ。」

全力で当たって砕けておいで」

ニコリとしたヨウちゃんの笑顔が何だか胡散臭い。

……。

やっぱり砕けること前提ですか？

「大丈夫だよ。」

ツキちゃんなら、大丈夫だよ」

形の良い指先がアタシの髪を梳きながら優しく撫でてくれる。

温かい気持ちの流れ込んでくるみたい。

アタシは感謝の気持ちでいっぱいになる。

ヨウちゃんが色々と言ってくれて良かった。

でなかったら甘ったれなアタシは、今だに自分の気持ちに気付かなかった。

気付かないフリをしてた。

「ありがとね、ヨウちゃん」

心配してくれて。

慰めてくれて。

背中を押してくれて。

アタシに手を差し伸べてくれて。

アタシは感謝の気持ちを込めて、生まれて初めてタイちゃん以外の男性にキスをした。

といってもホッパタだけだね。

まさか。

ヨウちゃんとアタシの寄り添う様子を、タイちゃんが見ていとは思わなくて……。

13 タイマン勝負

13 タイマン勝負

ヨウちゃんに頑張る宣言をしたものの。

アタシは未だにタイちゃんに告白できずにいた。

全然顔を合わさないって訳じゃないけど、なかなかタイミングが無い。

しょうがないよね。

タイちゃん、あんまり家に居ないんだもん。

もしくは。

あのヒトと一緒になんだもん。

ふう……。

日課となってる花壇の水撒きをしながら思わず溜め息が漏れちゃう。

元から少なそうなアタシの幸せ残量が益々減少していくなあ…。

「どーしたもんかなあ…」

夏の夕暮れ空に虚しい眩きが霧散していく。

「迷っているのなら、私が大地をもらってもいいかしら」
後ろから艶のある声。

アタシは思わず垂直跳びしそうなほど驚いた。

振り向くと予想的中の人物が近づいてくるところ。

サンルームから出て来たのかミユールを履いてる。

なのに全然気付かなかったよあ…。

ここの一族は皆して足音とかしないんだもん。
心臓に悪いよおお。

「タイちゃんは物じゃありませんよ？」

近くに立たれると花の香りがホワンと漂う。

ここに咲いてるカサブランカと同じ香り。

オトナの女性って感じ？

「ありきたりなお返事ね」

対してアタシからは井草の匂いがしてるだろうなあ。

蚊取り線香を足元で焚いてるから。

「ふふ…。」

月ちゃんは優しいのね」

薄っすらと口角を上げて笑む様は何だか少し怖い。

「自分は物扱いされてるのだから、相手も物扱いすればいいのに」

な、なんかサラリと失礼な事を言われた気が…。

その上、瞳が笑ってないんですけどお？！

もしかして怒ってます？？

アタシ、そんなに悪いこと言った？！

「あの…ですね…、イイコぶるつもりないんですが…。」

ご存知の通り、アタシには選択権もなければ所有権もないんです」

背中に冷や汗をかきながら、アタシの置かれた現状を説明してみ

たり…。

夕方になっても依然蒸し暑くて寒いわけないんだけど…。

「そう。」

じゃあ、もらっても文句言わないのね？」

あうう。

ピシヤリと言われてしまいました。

もう言い逃れできるような雰囲気じゃないよお。

アタシは意を決して顔を上げる。
女は度胸だあ！！

「我がママが許されるなら……。
タイちゃんの気持ちを考えなくて良いのなら……。
アタシは誰にも彼を……あげたくありません。
……独り占めしたいですう……。」

言った……。

言ったよ、アタシ。

とうとう他人に言い切ってしまいましたあ……。

なのに。

「そんなに大地のことが好きなの？」

と更なる追撃が！！

「な、内緒です！」

「誰にも盗られたくないのに、まだ内緒なの？」
ううう……。

美人の笑顔は迫力あり過ぎで泣きそうです。

綺麗な顔に迫力のある笑みを貼り付けてます。

どこまで追い討ちしてくる気なんでしょうか？！

もうそろそろ開放してくれないと脳の処理許容量超えそうです。

……。

「ま、まだ本人に告白してないから、他の人には内緒です！」

「私は言えるわよ、好きであること。」

隠そうとは思わない。

好きって言葉を出し惜しみなんてしないわ」

あううう。

心臓がギュツて痛いよお。

こ のままじゃ、タイちゃんに告白する前に止まっちゃうよお。

気が付くとアタシはプルプルと震えてた。

怖いんだか。

悔しいんだか。

悲しいんだか。

何を言い返したら良いのか分からなくて俯いて立ち竦む。

「月ちゃん」

唐突に腕に触れられて一瞬ビクツとなる。

「イジメ過ぎちゃったわね」

まったくですう。

逃げずに此処に居るだけで褒めて欲しいくらいです。

こういうの馴れてないんです。

田舎の山奥で数人の老人に囲まれて数年前まで暮らしてた身としては、若い人とのというか、他人とのコミュニケーションのとり方まだ学んでる途中なんですう…。

「顔、上げて？」

……あれ？

刺々しい雰囲気が消えた…？

お怒りが解けたのかな？

恐る恐る視線を上げると、そこには以外な事に少し楽しげな瞳。

「あの…」

アタシが何か言うよりも先に、

「私、貴女が嫌いじゃないわ」

言いながら綺麗な指先がアタシの頬に触れる。

ゆっくりと滑るように頬から唇へ移動して……。

「可愛い唇ね」

美人に褒められても褒められた気がしないのって、何でなのかなあ。

トホホな気分になるのはアタシの修行不足？

目の前には、垂涎の美貌。

形の良い鼻。

パッチリ二重で。

睫バサバサで。

瞳がキラキラしてて。

唇はプルンとしてて。

……………あれ？

近すぎない？

「！！！！！！！！！！」

気付いた時には既に遅し。

真っ赤な唇はアタシの唇に重なってた。

「あら。本当に甘いわね。

さすがウサギさんね」

何？

何が起こったの??

「大地がアナタのキスは甘いって言うから試してみたくなったの」
き、キスされたあ！！??

え？

な、何で!?

新種の嫌がらせ???

「おれに一つ教えてあげる。

女は自由に生きて良い生き物なのよ
勿論、月ちゃんもね」

女の人だよな？

ホントは男とかじゃないよね？

だって唇、ふによんて柔らかかったもん。
男の人と違ってメチャやわやわでえ。

なんかフルーティだったなあ…。

………て、そういう問題じゃなくてえ！！！！
「ご馳走さま。」

パニックを起こしてるアタシは、置き去りにされたことにも気付
かずに呆然。

頭がグルグルして。

「ツキ、いつまで水撒きしてるんだ」

タイちゃんに声をかけられて、やっと現実に戻った。

14 二人で居る未来【大人表現有】（前書き）

この頁は【大人表現有】です。
問題のない方のみ続きをどうぞ。

14 二人で居る未来【大人表現有】

14 二人で居る未来【大人表現有】

気が付くと陽はすっかり暮れていた。

「ツキ、家に入れ」

久々に聞いた気がするタイちゃんの声。

「突っ立ってると蚊に刺されるぞ」

話しかけられてるのは分かるんだけど……。

「……」

蚊取り線香は残りわずか。

このままだとアタシの美味しい血液は奴らの夕食になっちゃうこと間違いなし。

けれど脳はループエラー状態で、次の行動に移る信号を送るのを放棄しちゃってる。

「お前、大丈夫か？」

「うん……」

タイちゃんもさすがに変に思ったみたいで。

サンルームから出てくるとアタシの手を引いて家の中に回収してくれた。

「……何かあったのか？」

あ。

珍しくも心配そうな顔。

そのせいかリビングに移動しても離れようとしなない。

このところアタシに近寄ろうとしなかったのにね。

「…大丈夫だよお…」

キスされてビックリしちゃったただだから…」

安心させなきゃって、目を合わせようと顔を上げたら…」

タイちゃんがアタシを睨んでた。

射殺することができそうなほど鋭く。

あまりの形相にアタシは思わず息を呑む。

本能的な恐怖に体が竦む。

ドンッ！

突然に強い力で腕を引かれて、アタシは勢いあまって壁にぶつかる。

痛いよ、タイちゃん！

でも抗議をさせてもらう間なんてなくて…」

両肩を壁に押さえつけられてしまった。

「許さない」

「な…っ」

何が、と問うよりも早くタイちゃんの長い指が乱暴にアタシの顎を掴んで上向かせる。

気付いた時には噛み付くように唇を塞がれてた。

「…っ…」

実際に噛み付かれた。

タイちゃんの犬歯が当たったみたい。

下唇にピリッと痛みが走ったから。

正に喰いつかれたかのような激しさ。

勢いに吞まれてアタシは現状を把握しきれない。

だって。

せつかくタイちゃんへの気持ちを自覚したところだったのに。
せつかくヨウちゃんとは未遂で済んだのに。

事もあるうか恋敵に唇を奪われちゃうなんて!!

しかも女の人……、どーいうこと!!!!??

ペチャリと卑猥な音が上がってる。

「や……あ……ん……ん……っ……」

深い繋がりに酸欠に陥りそう……。

あんまりにも激しくて、どう呼吸していいか分からなくなってる。

「は……ふ……う……」

吐き出す息が熱くなる。

少し隙間が開いても、また直ぐに角度を変えて深く侵食してくる。
くちゅって練りまわされて……。

アタシの下唇も舌も一緒にタイちゃんに食べられちゃってて。

ジュツて強く吸われる度に切ったところがピリピリ痛む。

もお何がなんだか……。

そんな状況下でアタシのオツムは正常に働いてくれる筈もなく。
結果。

タイちゃんとの久々のキスに、アタシの理性は呆気なく崩壊しちゃった。

頭がボーっとしてしまうほど、タイちゃんとのキスは気持ち良かった。

体が共鳴するかのように喜んでる。

ピチャピチャって口の中を舐め回される度に頭の中が融けてく感じ。
ホントに融けて耳から出たらどうしょお。

それでもなく「脳みそ足りない」って、タイちゃんに言われてはっかなのにい…。

顔が熱くなって、体も熱くなって…。

とにかく全部が溶けちゃいそう。

小さな胸の奥もバクバク早打ちでウルサイったらない。

もともとタイちゃんのラトにアタシが選ばれたのも、この相性の良さのせい。

一族の中でもダントツだろうって。

お互いの血が呼び合うんだってダイパパが言ってた。

現に初めて会った日もそうだった。

アタシたちは互いの特別な匂いを感じて酔っ払いそうになっただけだから。

「…ん……」

ビクリとする体。

タイちゃんの吐息が濡れた唇にかかって、スーとした感触にまで感じてしまう。

零れる唾液を、唇を、舌で何度も舐められて。

アタシの唇は柘榴みたいに紅く膨らんでるに違いない。

なのに…もっとももっとって思っちゃう。

「タイ…ちゃ…ん……」

顎を開放したタイちゃんの手は、アタシの肩から腕へと撫でるようにゆっくり伝ってゆく。

やがてアタシの掌に行き着いた大きな掌は、その丸ごとを包むようにギュッと握ってくる。

その間もタイちゃんの舌はアタシの舌を吸っていて……。

「…ふ…う……」

手も唇も拘束して。

それでも足りないのかな。

両の手をそれぞれ壁に縫いつけて。

終には体までもがタイちゃんの大きな体で壁へと縫いつけられてしまった。

「ツキ…」

名前を呼ばれると心が震える。

ジワジワと熱に脳が侵食されてる。

爪先立ちで縫いつけられて辛い体制の筈なのに、体の身動きがまったくとれない。

ピタリと重なって。

隙間なく胸もお腹も重なって……。

その時になってタイちゃんの心臓も凄く早さでドクドク言ってるのにアタシは気付いた。

「血の味がする…」

ブレスの合間にタイちゃんが溜め息のような呟きを零した。

「お前の唇、甘い……」

言われてアタシは思わずハッとした。

突然に思いだした。

あのヒトの言葉がフラッシュバックした。

『大地がアナタのキスは甘いつて言うから試してみたくなったの』

そうだ。

流されてすっかり問題を置き去りにしてたよあ。

あのヒトとタイちゃんとアタシの関係をハッキリさせなきゃ！！
キスしてる場合じゃないよ！！

まずは告白するって決めたのに…。

ちゃんとタイちゃんに自分の気持ち伝えて。
決着つけて。

全てはそれかれないと前に進めない。

「た…タイちゃ……」

唇の角度が変えられる隙に名をよんで、今更ながらもがいてみる。

でもタイちゃんの力は凄く強くて、アタシの体はビクともしない。しょうがなく……。

本当にしょうがなく、アタシは思い切ってタイちゃんの唇に齒を立てた。

「つつ……」

ガリツと嫌な感触。

広がる仄かな鉄の味。

アタシの唇はやつと開放された。

ゴメンね、タイちゃん。

痛かったよね？

案の定、タイちゃんはムツとした表情。

「また…俺を拒むのか」

キスは止めてくれたけど体はまだ開放してくれなくて。上から不機嫌な視線が下される。

「アタシだってタイちゃんを拒みたくないよ」

近い視線を必死で受け止めながら、アタシは精一杯を言葉にする。拒めるくらいならどんなに気持ちになるか知れないよ。

だからちゃんと伝えなきゃ！

「アイツに…、太陽に義理立てか？」

「ヨウちゃん？」

一瞬、何を言われてるのか分からなかった。

「何でヨウちゃんが出てくるの？」

本気で訳が分からなくて、アタシにしては珍しく怪訝な表情で逆に聞き返してしまった。

タイちゃんの顔付きが苦々しいという感じに変わる。

「お前、ヨウを選ぶつもりだろ？」

少し剣呑な色を潜めて確認するように問われて、やっとアタシはどう意味なのか察した。

ヨウちゃんに乗り換えたのかって聞かれたのか……。

想像してない質問だったから、直ぐにわからなかったよお。

「選はないよ。」

ヨウちゃんは受け入れてくれるって言うてくれたけど……。

ちゃんとお断りしたもん」

「…なら何で拒むんだ」

分からないって顔をしてるタイちゃん。

そうだよね。

今までが今までだもん。

ちゃんと話さないと、ただダメって言われても分からないよね。

「前にも言っただけど…。」

アタシは今までみたいな関係、続けられない」

「お前は何をそんなにこだわってるんだ」

少しウンザリしたようなタイちゃんの声。

でももうアタシは黙ってられない。

もう気付かないフリできない。

「アタシは知ちゃったから…。」

タイちゃんに女のコとして見てもらいたって自分の気持ち、知っちゃったから。

だから一つ一つハッキリさせていかないとダメなんだってやっと気付いたの」

できるだけ一生懸命タイちゃんの瞳を見つめる。

気持ちを分かって欲しいから。

アタシは一つ大きく息を吐き出して…。

意を決した。

「タイちゃんにとってアタシは力を与える獲物でしかないの、自分でわかってる。

それがアタシが独り生き残ってしまった宿命だもん。

神也の家にとってだって、子孫繁栄のためだけの存在だってわかってる。

独りでは生きていけない、弱いアタシに拒否権ないの分かっているよ」

なんか言いながら泣きそうになってくる。

タイちゃんは何も言わずにアタシの次の言葉を待ってくれてる。

「でも、アタシにも心があって、恋心もあって。

やっぱり好きなヒトには好かれない。

好きなヒトに利用対象にしか見られないのは悲しい」

泣かないで最後まで！

最後まで、ちゃんと伝えなきゃ。

「最終クエストです。

タイちゃんにとってアタシは何？」

「随分と今更な質問だな」

鼻梁に皺を寄せてタイちゃんは面白くなさそうに揶揄する。
うつ…。

心が折れちゃいそうだよ…。

「タイたちちゃんにとってアタシが獲物でしかないなら…。

子孫を残すためだけのパートナーなら……」

頑張れアタシ。

頑張れ！！

「心が壊れてしまう前にいつそ屠って欲しいの」

「ツキ……何を……」

「アタシは心がない触れ合いは、もう耐えられないから……！
かといって他の人に自分を捧げることができないから……」

頑張れ！！

「アタシは……タイちゃんが好き！
好きなの……！」

言い切った。

言い切ったよお……。

途端に力が抜けて。

アタシはフニヤリとタイちゃんに倒れかかってしまっ
き、緊張したあ……。

なんかもう、できることならこのまま気を失ってしまいたい……。

「お前はバカか……」

ヒドイよ、タイちゃん……。

一生懸命の告白だったのにい。

でも言葉とは裏腹に、タイちゃんの声は何だか柔らかい。
いつの間にか背中が壁から開放されてて。

代わりにタイちゃんの腕がアタシを抱きしめてくれてた。

「月、ゴメンな……」

安心をくれる腕の中。

ぐったりとしたアタシの耳もとでタイちゃんの声がする。
もう怒ってないみたい。

少し低くて心地よい美声。

「俺は恋という感情がよく解らない」

ははは……。

これってフラれてるんだよね、アタシ。

瞬殺ですかあ…。

ぐすん。

「お前は俺の前でしか泣かないと思ってたのに、アイツの前で涙を見せた。」

自分からキスもしてた。

だから太陽を選ぶつもりなのかと思った。」

アタシが大泣きした時、タイちゃんどつかで見てたんだ…。

カッコ悪いところ見られちゃったなあ。

やっぱりメソメソするもんじゃないね。

久々に泣いたから、知恵熱出して寝込むハメになったし。

「俺はお前がヨウに触れられているのを見て怒りで体が震えた。」

あの時、初めて自分の中のドス黒い感情に気がついた」

「…タイちゃん…？」

「月。」

お前を俺以外の誰かに触らせたくない。

最後の血の一滴まで渡したくない」

タイちゃん、それって凄い独占欲だね。

恋愛感情じゃないのは悲しいけど…。

でもちよっと嬉しいかな。

「我がままでゴメンな」

アタシの事を慰めるように、タイちゃんが頬を摺り寄せてくれる。
「いいよ、もう。」

タイちゃんの我がままなんて馴れてるもん」

なんとなく結果は分かってたもん。

でもちゃんと自分の気持ち全部言えたから悔いは無いの。

もうタイちゃんに手を繋いでもらえなくなっても。

怖い夢を見た夜に抱きしめてもらえなくても。

二人乗りで一緒に学校に通えなくても。

たとえ今ここで屠られたとしても。

「ツキ」

静かな、とても静かな声でタイちゃんがアタシの名を呼ぶ。

そして唇に触れるだけのキス。

たぶん最後のキス。

なのに…。

「ツキハナ」

本当の名前を呼ばれて弾かれたように顔上げた。

タイちゃんは声と同じく静かな瞳でアタシを見つめてた。

その色は何故だかとても暖かくて……。

月華。

アタシがお母さんから付けてもらった大事な名前。

それを教えたのも、呼ぶ事を許してるのも……。

タイちゃんだけ。

なんで気付かなかったんだろう。

あの事件の時。

死にそうになったところをタイちゃんに助けられてから。

アタシにとってタイちゃんは大事な人で…。

無意識の内に一生の人って決めてたんだ。

こんな簡単な事にも気付かないままで…。

それに、もう一つ思い出した。

名前が記憶の箱を開ける鍵だったかのように、一つの言葉がアタシの中に蘇る。

タイちゃんが言うように、アタシ、本当にバカだ。

大量の出血で意識を失いそうなアタシに言ったタイちゃんの言葉。
あれは……。

「『名前を呼んでしまったら、もう屠れない。』

それはもう愛しい存在でしかない」

あの時、俺はお前にそう言った。

思い出したか？」

「タイちゃん、アタシ…っ…」

名前を呼んだだけで、気持ちがいっぱいになって。

我慢していた涙がポロッと零れて。

一粒ながれたら止まらなくなっちゃって。

もう次の言葉が紡げなかった。

「ふう…っ…っ…」

「俺はお前の全てを自分の物にしておきたい。

その対価が俺自身だっていうなら払うしかない」

優しく背中をポンポンされたら、涙、止まらなくなっちゃっよお。

「でも…心は…、タイちゃん…気持ち…？
無理は…いやあ…っ」

自分が好きの気持ちを变えられなかったから。
気持ちって意志とは違うものだから。

「心配するな」

涙を指で拭ってくれながらタイちゃんはキツパリと言い切る。

「ツキと出会って以来、お前以外に執着はないから問題ない」

「だっ…て…」

「ちよつと懐かしかったただけだ。

恋心は追々に育てていけばいいだろ？」

「うっ…う…っ…」

安心して気が抜けたのか、もうアタシは涙を止める気力もなかった。

「ツキ。

一族のためでなく俺のためだけに傍に居てくれ」

「タイひゃ…ん…うああ…ん…っ…」

一族の繁栄のためでなく、自分のためにと言ってくれたタイちゃん。

その気持ちが嬉しくて、嬉しくて。

アタシはもう堪え切れずに大泣きした。

子供みたいに声を上げてボロボロに。

涙の滝の向こうでは、タイちゃんが優しい笑みを浮かべて見つめてくれていた。

「月華。

俺のラートーナとして傍にいてくれ」

それはあの時、気を失う前に聞いた、夢の入口で聞いた言葉。

今日は両目を開いてしっかりと相手を見つめ返す。

アタシは涙を自分のTシャツで拭って。

返事の代わりにタイちゃんの唇に誓いのキスを贈った。

この日、タイちゃんとアタシは、ずっと一緒に生きていくって約束したのでした。

END

14 二人で居る未来【大人表現】（後書き）

大地と月の約束シリーズ1「タイちゃんとアタシ」終了です。

タイとツキの出逢いに触れないまま書きすすませて頂きました。理由についてはブログでの後書きをご参照のほど。

また続編やら番外やらが載っております。

諸々に興味のある方は、のぞいてみてやって下さいませ。

この後に、ブログでは時系列的にまだ目次を作れない番外を少しUPさせて頂きます。

いま少しお付き合い頂けたなら幸いです。

ご拝読ありがとうございます。

ももいろハート

<http://mankaisakura.blogspot.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8342/>

大地と月の約束「タイちゃんとアタシ」

2010年10月11日18時25分発行